

イリノイ大学モーテンソンセンター アソシエイツプログラム参加報告

ながさか いさお
長坂 功

(日吉メディアセンター主任)

1 はじめに

2022年5月25日から6月21日¹⁾の約1か月間、米国のイリノイ州アーバナ・シャンペーン市にあるイリノイ大学モーテンソンセンターで、図書館員のための国際図書館研修プログラム²⁾に参加する機会を得た。本研修は私立大学図書館協会とモーテンソンセンターとの協定により、私立大学図書館協会加盟館の図書館職員が参加できるものである³⁾。参加希望者はこの協会の国際図書館協力委員会とモーテンソンセンターの選考を経た後にアソシエイツのメンバーとして参加できる。

私は2020年度に参加予定であったが、コロナ禍で本研修の開催が2年間中止されたため、今回の参加となった。参加者は、日本・韓国・南アフリカ(各2名)、パキスタン・オマーン・カタール・ガーナ(各1名)の合計7か国から、10名だった。

2 研修概要

イリノイ大学モーテンソンセンター(以下「センター」とする)はモーテンソン夫妻の寄付によりイリノイ大学図書館内に1986年に創設され、1991年以降は活動の一つとして、アソシエイツ・プログラムという名称で米国以外の世界中の図書館員を対象とした非学位の研修プログラムをほぼ毎年開催している。これまで世界各国から1,300名以上がこのプログラムに参加しており、発展途上国と位置づけられる国からの参加者が多く、私が参加した回もアフリカ、中近東からの参加者が半数以上であった。日本からの参加者は毎年若干名あり、私立大学図書館協会からの参加者の報告書はこの協会のホームページ³⁾で公開されている。

センターの事務室や講義ルームはイリノイ大学の学部図書館内の一角に位置している(2022年8月にメインライブラリー内へ移転)。センター長は教授職のClara M. Chu氏、サポートのスタッフ2名は元

センター長のBarbara Ford氏と図書館情報学系の元教員のAmani Ayad氏で、すでに定年を過ぎた年齢であった。リタイヤ後もなお、国際間の交流事業に身を置く姿は、図書館員としてのプライドとホスピタリティを感じさせる。センターのミッションは「国際的な教育、理解、平和を促進するために、世界中の図書館と司書の間の国際的なつながりを強化すること」⁴⁾とあり、その具体的活動は、北米の最新の図書館事情を参加者に教えるとともに、米国流のライブラリアンシップを米国以外の図書館員に対して教育し、国際間の図書館協力の発展につなげることである。

本プログラムは講義、リーダーシップ研修、ワークショップ・交流・発表、図書館等の見学訪問で構成されており、センターが決めたスケジュールに沿って内容をこなしていくスタイルである。プログラムは全て英語で行われ、参加者には自ら進んで発言するような積極的姿勢と、センターのスタッフや講義のプレゼンター、あるいは他の参加者との協調性が求められる。そしてプログラムの課題に対してお互いが同僚として取り組み、問題意識を共有し、解決策を一緒に考えていくことが必要である。プレゼンターは外部団体や企業の派遣講師が行うこともあったが、イリノイ大学の教員・図書館員が担うことが多かったため、北米の図書館事情を反映するものではあるが、結果的に紹介事例はイリノイ大学図書館のケースとなることが多かった。

3 イリノイ大学、イリノイ大学図書館

イリノイ大学は18の学部、学生数約55,000人⁵⁾、教職員数約8,000人⁶⁾を擁する総合大学で、その図書館は1,300万冊以上の蔵書を持つ全米でも最大規模の大学図書館の一つである。年間の資料購入予算は2,100万ドル(1ドル135円換算で約28億円)である。日本との大きな違いの一つは図書館員のステータスで

ある。米国の大学図書館の特徴でもあるが、教員資格を持った図書館員がおり、イリノイ大学図書館では約90名が専門部署に配属されている。

また、イリノイ大学には全米No.1の評価⁷⁾を持つiSchool⁸⁾があり、いわゆる図書館・情報学系のコースがある。iSchoolの校舎見学の際、そこで学ぶ大学院生とのディスカッションもあり、かつてのライブラリースクールが形を変えて存続している姿を知った。ただし年間のコストは授業料だけで25,000ドル以上とアメリカの学費の高騰は凄まじい。学生によってはレジデンス費用と生活費がさらに加わる。このことについてイリノイ大の関係者はよく理解しており、学生の図書購入費を減らすために電子ブックやeText⁹⁾という名称のWebインタフェースを、図書館やイノベーションセンター¹⁰⁾と呼ばれるサポート部署が用意することや、民間出版社でなく、大学出版社をより活用して学術情報の流れを大学側に取り戻すためのプロジェクトを行っていることも、後の講義で言及があった。

図書館業務システムはAlma/Primo VEを使用しており、これは慶應でも使用しているものであるが、利用者用のディスカバリーサービスは独自開発のEASYsearch¹¹⁾というダッシュボード型の統合表示インタフェースを組み合わせているのが印象的であった。これはWeb Scale Discovery Services (WSDS)であるが、検索結果を一覧に混ぜ合わさずに、記事や電子書籍、図書、その他のWebリソースをそれぞれのボックス内で表示させる工夫がなされていた。

Almaが業務利用において使い易いかどうかを各所で尋ねてみたところ、インテリジェント型のクラウドシステムということで図書館員側の評価もなかなか高いようであった。



図1 イリノイ大学図書館 Main Library

4 プログラム内容

(1) 講義

イリノイ大学図書館の教員・実務担当者らによる北米の図書館事情・動向に関するもの、イリノイ大学図書館の業務に関するもの、見学・訪問先の担当者により行われるもの、センター長による情報学に関する講義など、テーマも学術図書館が現在直面している問題を扱うなど多岐にわたっていた。講義内容は表1のとおりである。

表1 講義・リーダーシップ研修のテーマ

図書館業務に関する講義
デジタル戦略
- リサーチデータサービス (研究データ管理)
- デジタルコレクション
デジタル・スカラシップ
デザイン思考と人間中心のデザイン
アクティブ・ラーニング
ブランディング・マーケティング
ディスカバリーシステム
メイカースペース
専門能力開発
リサーチ・コモンズ
スペシャルコレクション
図書館評価
図書館コンソーシアム
OCLCについて
人工知能 (AIとマシンラーニング)
リーダーシップ研修
リーダーシップスタイル (DiSC分析)
リーダーシップトレーニング (SILL)
アクションプラン作成 (+SWOT分析)

すべてを紹介できないが、講義の傾向として、図書館サービスの新たな展開について言及しているものが多かった。サービスがユーザー中心となりつつあることや、大学でのコミュニケーションがユーザー同士のあるいは教員・図書館員側との、よりオープンなコラボレーションへと変容していることを踏まえているのであろう。

一つの例としてイリノイ大学図書館ではすでにリサーチデータサービスが展開されており、研究データ使用に関する相談・助言を行っているだけでなく、Illinois Data Bank¹²⁾というシステムで研究データを整理・収集・蓄積する枠組みが整備されている。

同様の枠組みはシカゴ大学、オハイオ州立大学の各図書館でも紹介があった。

(2) リーダーシップ研修

通常の講義に加えて、参加者の自己啓発を促し、組織においてリーダーシップを発揮するためのスキルトレーニングが用意されていた。コミュニケーション分析手法の一つとして知られているDiSC¹³⁾をコンサルティング会社の派遣講師から学んだ後、SILL (Strengthening Innovative Library Leaders)¹⁴⁾という図書館員を対象としたセンター独自のリーダーシップカリキュラムにつなげる構成であった。これはリーダーシップ発揮に伴う本質的な要件は、一般の企業や団体組織におけるものと図書館とで何ら違いはないことを示す意図がある。

DiSCとは、職場における個人の行動特性、パーソナリティを4つのタイプに診断し、自分の特性を知った上で、タイプの異なる他者との円滑なコミュニケーションを目指すための手法である。図書館に特化したものでなく、組織における一般的な行動特性を理解するものである。他の手法としてSWOT分析や目標設定の手法であるSMARTについての講義もあわせて行われた。SILLでは図書館に特化したテーマを扱い、リーダーシップの発揮に求められる行動やコミュニケーションをグループワークで定義し、問題解決へ導くものであった。そして、帰国後に自分の職場でリーダーシップを発揮するためのアクションプランを作成し、そのプランについて個別にセンター長やスタッフと面談する時間もあった。持ち帰った研修の成果をいかに業務や自らのキャリア構築に活かすのがこれからの課題である。



図2 DiSC研修の様子

(3) 他図書館・他機関への訪問

本研修ではイリノイ大学以外の図書館や他機関へのツアーも用意されており、長距離バスや鉄道などで移動し、宿泊を伴うこともあった。滞在中の訪問先は表2のとおりである。

表2 見学・訪問先一覧

大学図書館・施設
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 (University of Illinois Urbana-Champaign) Undergraduate Library Main Library Oak Street High Density Storage Grainger Engineering Library (IDEA Lab) Center for Innovation in Teaching & Learning (CITL) CITL TechHub
オハイオ州立大学 (Ohio State University) William Oxley Thompson Memorial Library Research commons
シカゴ大学 (University of Chicago) The Joe and Rika Mansueto Library Regenstein Library
州立・公共図書館
アーバナ公共図書館 (The Urbana Free Library)
シカゴ公共図書館 (Chicago Public Library)
ウェスターヴィル公共図書館 (Westerville Public Library)
アーサー公共図書館 (Arthur Public Library)
イリノイ州立図書館 (Illinois State Library)
その他
OCLC (Online Computer Library Center)
プリツカー軍事博物館・図書館 (Pritzker Military Museum and Library)
エイブラハム・リンカーン大統領図書館・博物館 (Abraham Lincoln Presidential Library and Museum)

いくつかの訪問先で、Maker Spaceと呼ばれるものづくりの空間を図書館の新しいサービスとしてみることができた。3Dプリンタやレーザーカッター、VRなどが大学図書館や公共図書館で日常的に使用されていることをあらためて知った。帰国後に自分の図書館でMaker Spaceを設置するための調査をしている参加者も複数いた。慶應では湘南藤沢キャンパスで展開しているFab Campus、湘南藤沢メディアセンターのFab Spaceサービスがそれにあたる。私も湘南藤沢キャンパス勤務時には当時の担当者として取り組んでいたが、日本では国内の実態を見る限り、図書館のサービスとしてはまだまだ普及して

いないようである。

今回の参加者の多くは大学図書館員であったが、大学図書館以外の機関を訪問することで、職域の多様性ととも、図書館員に共通する姿勢、根底にある職業意識の存在を参加者へ認識させるセンター側の意図があるように思えた。

見学した大学図書館ではシカゴ大学のガラスで覆われたドーム型形状のJoe and Rika Mansueto Libraryが印象的であり、開放的で近未来的な雰囲気であった。350万冊以上収容できる自動式地下書庫を持ち、巨大なロボットクレーン装置が設置されており、リクエスト図書を3分ほどで取り出すことができていた。シカゴ大学では見学以外にデジタル・スカラシップについての講義も受けた。図書館内に設置されたCenter for Digital Scholarshipという専門部署で対処しており、この取り組みは日本よりも一歩先んじているといえるだろう。

オハイオ州立大学のThompson Libraryの建築も新旧の調和が印象的であった(図3)。ガラス天井とガラス壁、クラシックなインテリアが醸し出す空間は審美的で息を飲むほど美しいものであった。またリサーチ・コモンズが図書館のサービスとして用意されており、研究データ利用や学術研究成果の出版についての相談窓口となるなど、研究者のサポートを行っている。



図3 オハイオ州立大学 Thompson Library

5 参加者との交流

研修期間中、参加者にはそれぞれ1名のライブラリーバディと呼ばれる、イリノイ大学図書館の担当者1名が付き、ささいな相談などを受けるメンタ的な役割をしてくれる。私の担当は、日本の図書館

事情を研究しており、日本のいくつかの大学で研究員としての勤務経験もあるSteven Witt氏だった。週末にはドライブで近隣の田舎町や公園に連れ出してくれ、おかげで研修の合間に一息つけるような時間を過ごすことができた。

最初の週末にはBarbara Ford氏の自宅でウェルカムパーティーが開催され、センターの全スタッフとライブラリーバディ一同がアソシエイツを歓迎してくれた。慣れない土地で過ごす参加者を気遣っていたと思うが、The Urbana Free Libraryも出店しているアーバナ市のファーマーズマーケットに連れ出してくれたり、シャンペーン市のナイトミュージックライブを共に楽しんだりもした。全ての出来事はとても書ききれないがアメリカ人の文化・余暇の過ごし方を紹介してくれているようでもあった。この地域の人口は様々であったが、人々はとてもフレンドリーで平和に過ごしており、多様性を受け入れることを具現化したような街であった。



図4 ファーマーズマーケット会場

また前述したリーダーシップ研修でのグループワークシヨップに加えて、Chai Wai Presentationと称して、参加者が自分で発表テーマを決めて、全員の前で最終発表をする機会もあった。Chai Waiとはざっくばらんにトークを共有するという意味で、発表者と聴衆側とのコミュニケーションを促すものである。私は南アフリカの高等学校の図書館員であるVuyokazi Jamieson氏と共同で発表を行ったが、館種も異なる南アフリカの図書館員と寮内の食堂で夜遅くまで討議し、発表内容を擦り合わせ、英語のスピーチを互いにリハーサルしてチェックを行ったことを覚えている。この際、親切にもAmani Ayad氏が立ち会ってくれたのだが、これも貴重な経験であった。

6 おわりに

本研修は図書館業務の特定のテーマに焦点をあてるものでなく、内容の深さというよりは広さ、フラットな視点を重視した構成であった。短期間に講義で多くの情報を知り、北米の大学図書館事情を学び、センターのスタッフ、プレゼンター、案内してくれた米国の図書館員、各国からの参加者らと交流ができた。研修の実際の様子は、参加者が自らの学びや気づき、経験をセンターが思慮深くもWebサイト上に用意したブログ¹⁵⁾に残されているため、こちらでも参照いただきたい。イリノイの地での経験は、細分化した日常業務から離れて慶應のメディアセンターと図書館業務を俯瞰し、その目的やあり方を考える契機となった。図書館が置かれている問題状況は、すでにグローバルなものであり、日本も北米の事情と変わらないことも知った。

滞在中はプログラム以外の日常生活、新型コロナ対策、現地検査会場の選定、帰りの航空便のことまでセンターのスタッフが気を配ってくれたおかげで、安心して1か月間を過ごすことができた。モートンソン夫妻の寄付によってセンターが設立され、その資金により国際的な研修プログラムが継続運営されていることで、世界中の多くの参加者に恩恵を与え続けていることに畏敬の念を感じずにはられない。センターの方々への感謝とともに、寄付を活用して事業を成す米国社会の一面を知った。参加する機会を与えてくれた私立大学図書館協会と本学の諸兄に心より感謝を申し上げたい。

注・参考文献

- 1) この時点では日本から米国へのフライトには搭乗1日目の新型コロナウイルス検査での陰性証明書(英文)が、また帰国のフライトは出国前72時間以内の陰性証明書が必要とされた。
- 2) Illinois library - Mortenson Center for International Library Programs,
<https://www.library.illinois.edu/mortenson/>,
(accessed 2022-08-27).
- 3) 私立大学図書館協会：国際図書館協力委員会 - 海外研修,
https://www.jaspul.org/ind/committee/kokusai/kaigai_kensyu.html, (accessed 2022-08-27).
- 4) Mortenson Center for International Library Programs : Mission,
<https://www.library.illinois.edu/mortenson/about/>,
(accessed 2022-08-31).
- 5) Division of Management Information - UIUC Student Enrollment,
<https://dmi.illinois.edu/stuenr/index.htm>,
(accessed 2022-08-27).
- 6) Division of Management Information - UIUC Campus Profile - Campus Total
<https://dmi.illinois.edu/cp/default.aspx>,
(accessed 2022-08-27).
- 7) Best Library and Information Studies Programs Ranked in 2021, U.S. News and World Report,
<https://www.usnews.com/best-graduate-schools/top-library-information-science-programs/library-information-science-rankings>, (accessed 2022-08-27).
- 8) School of Information Sciences, University of Illinois Urbana-Champaign,
<https://ischool.illinois.edu/>, (accessed 2022-08-27).
- 9) eText : Center for Innovation in Teaching & Learning,
<https://etext.illinois.edu/>, (accessed 2022-08-27).
- 10) Center for Innovation in Teaching & Learning (CITL),
<https://citl.illinois.edu/>, (accessed 2022-08-27).
- 11) EASYsearch,
<https://www.library.illinois.edu/>, (accessed 2022-08-27).
- 12) Illinois Data Bank, University of Illinois Library Research Data Service,
<https://databank.illinois.edu/>, (accessed 2022-08-27).
- 13) DiSCについては下記コンサルティング会社による講義であった。Learning Alliances Company,
<https://learning-alliances.com/>, (accessed 2022-08-27).
- 14) SILL : Strengthening Innovative Library Leaders,
<https://www.library.illinois.edu/mortenson-leadership/>,
(accessed 2022-08-27).
- 15) Mortenson Center Associates Program : Associates Blog Page,
<https://mortensonassociatesprogram.wordpress.com/>,
(accessed 2022-08-31).